小犬のお話

氏原鋹

或る山の中の家に太郎さんと花子さんと云ふ二人の子供が在りました。日曜日の朝太郎さんはおかあさまから郵便を出して來てと言ひ付けられましたので、橋を渡つて行かうとしましたら、其橋のまん中に生れてまだ間のないちいさな小犬が寒むさうにブルブルふるえて弱つて居ました。太郎さんはこれは可哀想だ寒いからだろうと思つて其小犬を暖めてやつたらと考へまして、幸ひけふは日曜日で和服を着て居るので都合がよくすぐに自分の懐に入れてあたゝめてやりました。夫れから郵便を出して歸りましたが、小犬の事は誰にも言はずに居ました。太郎さんは時々自分の懐の中をのぞいて小犬の樣子を見ました。ところが、小犬は體が暖たかになつたせいか、だんだん元氣が出て來てそろそろ動きはじめましたので太郎さんは大層喜びました。おひる頃になつておかあさまが太郎さんの懐がふくれて居るのに氣付いて、太郎さんお前の懐がふくれて居るがどうしたのかと尋ねましたので、太郎さんは今朝郵便入れに行つて橋の上にふるえて居た小犬を拾つて來てあたゝめてやつて居る事を話しました。おかあ樣は大層おほめになつてそれは大變よい事をしたと、花子さんも呼んで來て共に喜んで其小犬をそれから可愛がつて飼ひました。

此犬がだんだん大きくなつて、ひるも夜もあやしい者が來ますとワンワンとほえて家の人にしらせます。夫れから感心な事は毎朝太郎さんと花子さんの學校に行く時はキツト門口で待つて居て山道のあぶなくない處迄送り、又學校から歸る時も毎日山道のあぶない處で待つて居てお供して歸ります。斯うして此犬のボチは太郎さんと花子さんの爲めになりますので、おとう樣おかあ樣も喜んで太郎さん花子さんの學校の歸る時間が遲くなつても安心し又太郎さん

も花子さんも大層此犬を賴りにして居ります。此太郎さんと花子さんとが毎日通つて行く山道は隨分高い處迄昇つて下る道で、其道はとても二人並んでは行けぬ一人づゝ行かねばならぬ道で、雨ふりの時又雨ふり後の道は山土ですべり易く少しもよそみなどは出來ません。夫れから此長い山道には電燈などがないので學校の歸りの遲くなつた時などは暗くて困ります。此の樣な道を毎日通つて學校へ行かなければならん太郎さんや花子さんの事を氣の毒に思つて上げて下さいませ、太郎さんや花子さんは此ポチのお蔭で毎日遠い學校へ心丈夫に通つて居ります。或時太郎さんと花子さんが學校から歸り道の山にかゝる處にいつも待つて居るポチが居ませんので、どうした事かと心配してそこいらをさがして見ましたが分りませんので、今日は遊びに來ず家に居るものと思ひ、家に歸つて見ますにポチは居ませんので、皆が大變心配してモー歸るかモー歸るかと思つて待つて居りましたが、一向ポチは歸つて來ませんので、皆は涙ぐんで居りました。夫れから日曜日を二つ過ぎた月曜日に太郎さんと花子さんが學校から歸り道のいつもポチの待つて居る所迄來ますと、ポチは元氣のない體で太郎さんと花子さんを見て懷かしげに寄つて來ましたので、二人ともにアーポチだと大層喜んで飛び付いて抱き付きました。そして太郎さんはポチお前は今迄何處へ行つて居たのか皆が心配したと言ひましたがポチは口がきけませんので、其弱つた元氣のない體を嬉しさうに尾をふつて答へて居ります。そこで太郎さんがポチの首に紙のたたんだ物に紐を付けて結んで有るのを見出して、花子さんと開いて見ますと、其紙に此可愛らしい犬がほしくなつていやがるのを無理に連れて歸り紐でしばつていろいろと御馳走をやりましたが少しもたべずだんだんやせて元氣がなくなるので、死にでもしたら大變だと思ひ紐をはなしてにがしますと、書いてありましたのでポチの居なくなつた事が分りました。夫れから家に連れて歸りおこう樣やおかあ樣などが大喜びて御座いました。夫れから前の通り毎日太郎さんや花子さんの學校の送り迎へをして居りました。